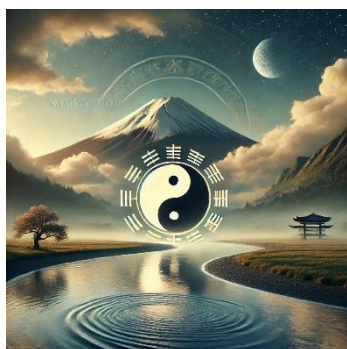


第17回 異と和～違いが調和を紡ぐ時代へ～



令和8年10月4日

仙台奥羽ロータリークラブ 10月臨時例会

MR オープンカフェ第一部

AIと人口減少の中で個人と地域が選択権を取り戻す「適材適所」戦略

発表者

- ファシリテーター:
光武寿人様（エーザイ株式会社）
中嶋誉様（エーザイ株式会社）
宗像靖彦（医療法人総志会）

集会テーマ

- AIと人口減少という二つの大きな潮流の中で、個人と地域はいかにして固有の価値を見出し、「適材適所」を主体的に実現していくのか。

集会全体を貫く問い

- 均一化の圧力の中で、私たちは自らの「適所」を選ぶ選択権を本当に手にしているのだろうか。そして、その選択を可能にするものとは何か。

第一部：個人の適材適所 — AIは「均す」か「際立たせる」か

主な視点

- AIによる能力の均一化と格差拡大の並存: AIは「苦手」を補い能力差を縮小する（均一化）一方で、熟練者が使いこなすことで成果が加速し、差が広がる可能性（際立ち）も持つ。
- 成長機会としての「苦手」: 特に若手にとって、苦手なことをAIに任せることは、思考力や問題解決能力を育む機会を奪う「諸刃の剣」になりかねないという懸念。
- 適材適所の再定義: 人を型にはめるのではなく、仕事をAIなどの道具で分解・再編し、個々の強みと弱みの組み合わせで価値を生むプロセスとして捉え直す視点。
- 判断軸の重要性: AIの回答を鵜呑みにせず、経験に裏打ちされた「判断軸」や「違和感を覚える感性」を持つことが、AI時代の人間の重要な能力になる。
- 主体的な選択: AIがあろうがなかろうが、「自分はどのような人間でありたいか」という根源的な問いこそが、個人の目指す道、すなわち「適材適所」につながる。

印象的だった気付き

- AIは一方向に作用する技術ではなく、補助の仕方次第で「均す」ことにも「際立たせる」ことにも働く。
- 苦手克服は「必須」から「選択」へと移行し、「どの苦手なことを物語として残すか」という選択が、その人の個性を形づくる。

- AI の答えの正誤を判断できること自体が、これからの時代における人間の重要な能力になる。
- 「尖る」とは能力の優劣ではなく、自分の興味・関心事を「生かす」ことであり、それによって社会の多様性が増すのではないか。

この部で広がった世界認識

- 第一部は、AI がもたらす「均一化」と「際立ち（個性化）」という二つの側面を巡って始まった。当初、「AI に任せるか、自力でやるか」という二元論で語られがちだった対話は、キャリアの段階や個人の価値観によって AI の意味合いが全く異なることを浮き彫りにした。経験者にとっては業務を加速させる「相棒」だが、成長途上の若者にとっては思考の機会を奪いかねない。
- この対話を通して、「AI が人間をどう変えるか」という受け身の視点から、「人間が AI をどう使いこなす自己実現するか」という主体的な視点へと転換が起きた。AI による能力の平準化は、スキルセットの優劣ではなく「何を伝えたいか」という本質的な価値で勝負できる世界を示唆する。そして、AI は私たちに「人間とは何か」「自分はどうかありたいか」を改めて問い直す鏡のような存在として捉え直された。「適材適所」とは、AI に最適な場所を教えてもらうことではなく、AI という道具を手し、自らの「ありたい姿」を探究し、実現していくプロセスそのものであるという認識が広がった。

第二部：地域の適材適所 ― 均一化の先にある固有性

主な視点

- 地域の「均一化」モデルの限界: 東京のような大都市を目指す戦略は、人口動態の現実（徳島、宮城等の比較）から見ても有効とは限らない。
- 「適材適所」としての地域戦略: 地域の強みや弱みを直視し、都会の模倣ではない独自の価値（例：北海道釧路市の「クール釧路」）を見出すアプローチの必要性。
- 「成功」の定義の問い直し: 神山町の事例から、「人口維持」という単一指標だけでなく、関係人口の創出や選択肢の増加といった「豊かさ」で地域の価値を測るべきではないかという視点。
- 個人の「得意」と地域の結びつき: 個人の持つスキルや情熱（例：スポーツ経験）が、次世代育成などを通じて地域を豊かにするという、身近な貢献の視点。
- 「魅力」と「生活」の分離: アートや自然といった「魅力」だけでは定住には繋がらず、子育て支援などの経済的・生活基盤が不可欠であるという現実的な視点。

どのように視点が補完されたか

- 第一部で探究された個人の「適材適所」は、第二部で「地域」というキャンバスに広げられた。「AI による能力の均一化」と「大都市への一極集中」は、個人と地域が直面する相似形の課題として重なる。特に「電車のない徳島」というエピソードは、画一的な基準で測れば「弱み」に見えるものが、視点を変えれば唯一無二の「強み」や「個性」になり得ることを象徴し、第一部で語られた「AI にはない人間の強み」というテーマを鮮やかに補完した。
 - さらに、神山町の「魅力は増したが、人口は減った」という複雑な現実は、「成功＝人口維持」という固定観念を揺るがし、地域の価値を測る多角的な物差しの必要性を示した。そして、個人の「得意を伸ばす」構図は、地域では「基盤を AI 等で支え、固有の関係性と資源を際立たせる」構図として重なり、個人の貢献と地域の未来が地続きのテーマであることが共有された。これにより、適材適所の議論は、単なる能力の配置から、生活者の視点を含んだ持続可能なコミュニティデザインの問いへと拡張された。
-

第三部：統合された視座

統合された視座

- 「人」と「地域」という異なるスケールで語られた「均一化」と「適材適所」は、地続きのテーマであった。AIによる能力の均一化が進む世界で人が固有の価値を見出すプロセスと、大都市への一極集中が進む中で地方が独自の魅力で存続しようとするプロセスは、相似形をなしている。
- どちらも、外部の基準に合わせるのではなく、自らの内なる特性（興味関心、歴史、文化）に目を向け、それをどう輝かせるかという問いに帰着する。そして、その探求は最終的に**「選択権」**というキーワードに収斂される。AIや自治体の役割は、効率的なマッチングではなく、個人や地域が自らの「適」を選び取るための「選択肢」を豊かにし、それを行使できるプラットフォームを提供することにある。

全体を通して見えてきた本質

- 「適材適所」とは、予め用意された場所に自分を当てはめる静的な状態ではない。自らの「異」（他とは違う特性）を深く理解し、それを社会や他者との関係性の中で「和」（共鳴）させながら、自ら固有の価値を創造していく動的なプロセスそのものである。
- 人口維持は総量よりも「機能の持続」と「層の厚み」が本質であり、学び・仕事・暮らしの結び目を、自治体単体ではなく近隣圏を含むネットワークで編み直す設計思想が求められる。その中で、行政は「欲しい人材を明示して呼び込む」逆指名型のコーディネーターとなり、個人は「どのコミュニティなら自分の得意が希少化し活かされるか」という視点で場を選ぶ。適材適所とは、この双方向の呼び合いであり、関係の再編なのである。

参加者が持ち帰る問い

- 私（たち）にとっての「電車のない徳島」とは何か？ 一見すると弱みや欠点に見えるが、実は固有の価値の源泉となっているものは何だろうか。
- どの「苦手」をAIに委ね、どの「苦手」を自らの物語として残すか。そして、AIを使ってでも突き詰めたい「尖った部分」とは何か。
- 自分の持つ「得意」や「経験」は、どのコミュニティ・どのスケールで希少性を持ち、地域を豊かにするためにどう活かせるだろうか。
- 私たちは、自らの「適所」を選ぶための「選択権」を本当に手にしているか。その選択権を確かなものにするために、何ができるだろうか。

集会全体の流れ（思考の物語）

- 2026年10月4日の集会は、「AIは人を同じにするのか」という問いから始まった。第一部では、AIが個人の能力を「均す」側面と「際立たせる」側面を併せ持つことが示され、議論は「AIにどう使われるか」から「AIをどう使いこなすか」という主体性の問いへと深化した。「適材適所」は、AIに導かれる配置ではなく、自らのありたい姿を探究するプロセスとして捉え直された。
- 第二部では、その問いが「地域」へとスケールを変えた。「人口維持」という目標を前に、大都市の模倣（均一化）ではない、地域固有の価値を見出す「適材適所」が探究される。神山町の事例は、「成功＝人口維持」という固定観念を解き放ち、地域の「豊かさ」を測る新しい物差しを求める旅へと参加者を誘った。
- 終盤、第一部と第二部の視点が重なり、「個人が強みを活かす」とことと「地域が個性を際立たせる」ことは相似形であることが見えてくる。そして、「その『適』は誰が決めるのか？」という根源的な問いが、議論を「選択権」という本質へと導いた。AIも自治体も、人を管理するのではなく、一人ひとりが自らの人生を選び取るための選択肢を豊かにする存在であるべきだ、という「和」が生まれた。対話は、均一化の圧力の中で、個人と地域が自らの物語を主体的に編集していくための、確かな足がかりを築いた。

今日生まれた「異」と「和」

- 異
 - 「人口が減っても、選択肢が増えれば地域は豊かになれる」という、人口指標主義からの脱却を促す視点。
 - 「適材適所」を、「誰が『適』を決定するのか」という権力と主体性の問題として捉え直す視点。
 - 苦手の克服を目標ではなく「編集可能な物語の素材」とみなす価値観。
- 和
 - AI 時代の個人の在り方と、現代社会における地域の在り方は、「均一化の圧力の中でいかに固有の価値を見出すか」という同じ問いに直面しているという発見。
 - 適材適所の本質は、最適な配置ではなく、個人や地域が自らの生き方を選ぶ「選択権」を保障し、そのための選択肢を豊かにすることにあるという共鳴。
 - 基盤は均一化で支え、物語は人と地域で際立たせる—という二層の循環構造への理解。

一文で表す今回の集会

- AI と人口減少という鏡は、私たちが何者であるかを映すのではなく、私たちが何者になりたいかを問いかけ、その「選択権」を取り戻す物語の始まりを告げた。